全学の教職員・学生に訴える!!

五月二十九日午後一時半頃、文闘委の学生約二十名が、嵐山で開かれていた文学部教授会に乱入した。教授会は直ちに散会したが、文闘委の学生は多数の教員の残留を強要し、彼らの面前において教授会の続行をせまり、午後七時過ぎに及んだ。しかも、引続き学部長を監視しつつ、杉本町学舎四二〇教室に連行し、強制的に宿泊せしめ、「三十日午後零時開始の無期限団交」を一方的に宣言し、その後今日まで、連夜、数人の教員を指名して人質として宿泊を強制し、文闘委の学生の言う「団交」を継続させられている。しかも、その間六月一日夜には何らの予告なくして二闘委の学生十数名が乱入、同夜および翌二日にわたり「団交」を強制した。

この間の状況はけっして正常なものではなかった。夜の軟禁が不当であるばかりでなく、話し合いの場も、彼らみずから「人民裁判、つるし上げ」と称し、教員を犯罪者として糾弾すると公言している。教員にたいする暴言、誹謗、中傷、侮蔑、脅迫などの言葉は枚挙にいとまなく、その上数人にたいしては物理的暴力さえ加えている。教員たちの疲労困憊もその極に達し、すでに眼底出血の症状をあらわした文学部長をはじめ、数人がドクターストップをかけられている。さらに今のような状態が続くならば、これまで以上に人権の蹂躙や人道上のゆゆしい問題が発生する恐れさえ感ぜられる。

さて、大学問題に関しては、大学の各層の構成員が真摯な関心をもち、積極的に改革を志向して努力しなければならない。文学部教授会もその姿勢を持ちつづけている。だが、学生たちが直接に提起した問題を討議するにしても、また山積している日常レベルの当面の問題を処理するにしても、現時点においてはまず最初に正常な教授会の運営が絶対に必要であるにもかかわらず、文闘委は三月三十一日の教授会からはじめて三回にわたり教授会を妨害してきた。しかも、妨害する一方では現に続行しているような不当極まる「団交」を強制しているのである。

われわれは、このような文闘委の不条理な行動にもかかわらず、つとめて隠忍自重し、彼らの良識の回復を期待して説得を重ねている。

われわれは、全学の教職員と学生諸君がこの事態をありのままに認識し、事柄のもつ重要な意味を見極められるよう、全学教職員学生諸君に訴えるものである。

一九六九年六月三日　　大阪市立大学文学部

五月十五日の[　　]君傷害事件の発生に際し、大学は暴力否定の立場を確認し、加害者は同君に謝罪し、社会的責任を自発的にとることを勧告した。しかるにその後加害者は何ら反省の意を示さず、一部ではかえってそれが正当な行為であるかの如く広言されている。しかも、その後も学生間の暴力事件が学内外において続発している模様である。まことに遺憾の極みといわざるを得ない。

そもそも暴力行為は、人道上許し難いものであるのみならず、思想、表現の自由にもとづく相互の理性的討議と批判の場を大学から奪うものである。われわれは、特に理性の府である大学においてこのような暴力行為が横行することを絶対に否定する。学生諸君の強い自覚を要望するものである。

五月二十九日　　法学部教授会